

一般社団法人  
エゾシカ協会

YEZO DEER ASSOCIATION EST. 1999 IN HOKKAIDO

45

October 2018

- p2 知事への提言／エゾシカ管理のグランドデザイン
- p4 英国ハンティングスクールへの道⑨
- p5 DCCネットワーク活動報告
- p6 最新のエゾシカの生息動向
- p7 ワナ猟の世界⑩
- p8 青山則晴「料理の理」⑤



ご挨拶

代表理事 赤坂 猛 akasaka@yezodeer.org

去 5月19日に開催されました本協会の平成30年度通常総会において、筆者ら新役員が選任されました。これまで10年余と長きにわたり務められてきました前・近藤誠司会長及び井田宏之専務理事体制と同様に、よろしくご指導・ご協力を賜りますよう新役員一同お願い申し上げます次第であります。

さて、エゾシカ協会では、先ごろ政策提言書ともなる「エゾシカ管理のグランドデザイン」を公表しました。

このグランドデザインは、地域主体のエゾシカの資源管理、シカ捕獲認証制度を活用した人材育成、そして食肉衛生の確保等について、その中長期的なあり方を提案しています（詳しくは、p2の別稿をご覧ください）。本年度、エゾシカ協会は、節目となります協会設立20周年を迎えるに至りましたことから、これからの5年後、10年後等の将来構想（活動方針）を「エゾシカ管理のグランドデザイン」としてとりまとめたものです。

近年、エゾシカをはじめとする野生動物問題は、日本列島の津々浦々で大きな社会問題となっております。

ります。この社会問題に適切に対処していくための課題の一つとしまして、野生動物の専門家の育成・配置が不可欠とされています。

エゾシカを適正かつ計画的に資源管理し、その捕獲（事業）、更には食肉衛生などに専門的に関われる「地域の専門家」を育成し、適材適所に配置していく、そのような社会的なシステムを創り、動かしてゆくことが求められています。

2015年7月にスタートしましたシカ捕獲認証制度事業（以下、DCC事業）は、4年目となる本年度も盛会裏に完了しました。受講生は本道をはじめ本州方面から、さらにはお隣の韓国からもおいでいただきました。また、DCC事業につきましては、国や地方の行政機関からも関心をお寄せいただくなどしてきております。

今後、グランドデザインに基づき、DCC事業はもとより新たな事業等にも鋭意取り組んでゆることが、エゾシカ協会に課せられた社会的使命でもあると考えております。多くの関係する機関や団体等との更なる連携や協働にまい進してゆく所存です。

会員各位の一層のご理解、ご協力をお願いいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

一般社団法人エゾシカ協会役員名簿（2018年10月15日現在）

代表理事	赤坂 猛	
副会長	伊吾田宏正	酪農学園大学農食環境学群環境共生学類准教授
	曾我部元親	エゾシカ食肉事業協同組合理事長
専務理事	東谷宗光	
理事	近藤誠司	北海道大学名誉教授
	菅野 一	(公社) 北海道獣医師会専務理事
	野呂美紗子	(一社) 北海道開発技術センター研究員
	小谷栄二	ファームエイジ(株) 代表取締役
	大金弘武	丸大畜産(株) 代表取締役社長
	片桐成二	北海道大学大学院獣医学研究院 環境獣医学分野繁殖学教室教授
	松浦友紀子	国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総合研究所北海道支所主任研究員
	井田宏之	



# 北海道知事への提言

## エゾシカ管理のグランドデザイン

エゾシカ協会理事 松浦友紀子 koyummt@gmail.com



### 北海道知事や日本政府に対する要望の経緯

一般社団法人エゾシカ協会は、設立20周年を迎えるにあたり、エゾシカ管理の将来展望を示すグランドデザインを作成しました。北海道固有の自然資源であるエゾシカですが、個体数の増加によってさまざまな軋轢が生じています。エゾシカ管理計画に基づく個体数指数の目標水準は20年間達成されておらず、また達成後の個体数管理に関する青写真は描けていない状況にありました。そこでエゾシカ協会では、平成29年にワーキンググループを立ち上げ、7回話し合いと数えきれないメールのやり取りを経て、エゾシカ管理のグランドデザインを作成しました。本グランドデザインの目的は、エゾシカの資源管理、その人材育成および食肉衛生等について、中長期的なあり方を提案するものです。

### グランドデザインの概要

グランドデザインは、主に①地域主体の資源管理の推進、

②人材育成の推進、③食肉衛生体制の整備、④軋轢の管理の4つに分けられます。①では、現在のような緊急減少期、およびシカが目標水準に達した後の“持続的利用期”に移行した後の捕獲体制を提案します。②では、当協会が運営しているシカ捕獲認証制度（略称DCC）を活用した、関係機関の担当者や捕獲者の育成、確保、および配置について提案します。③では、タグ制度および獣肉検査資格者制度の創設、また捕獲現場における一次処理システムを提案します。④では、被害実態把握の精度向上および関係機関が連携した横断的・広域的な軋轢管理体制を提案します。その他にも、今後考えるべきさまざまな項目について、たとえば海外ハンターの受け入れといった新たな発想も提案しています。

### 北海道知事への手交

2018年7月9日、北海道庁にて高橋はるみ知事に本グランドデザインを手交しました。赤坂猛代表理事からグランドデザインの概要が紹介され、エゾシカは道民共有の財



高橋はるみ北海道知事(右)に「エゾシカ管理のグランドデザイン」を手渡す赤坂猛エゾシカ協会代表理事。2018年7月9日、北海道庁で。

産であり、その適正な管理については関係する行政機関や民間団体と連携をはかりつつ、総合的な対策を推進する必要があること、そしてエゾシカ協会としては、森林とエゾシカ、道民の共生を実現するための活動を続けることが強調されました。知事からは、とくに食肉利用を促進するための衛生管理や人材育成に関する提言について触れられました。今後もう少しエゾシカの個体数調整が必要であること、目標頭数を目指すと同時に、農業被害の軽減、有効活用を進めて、北海道の経済発展にも繋げていきたいとのお話がありました。

わずかな時間ではありましたが、我々の思いを伝える良い機会となりました。この場を作ってくださった笠井龍司北海道議会議員、北海道生物多様性保全課エゾシカ対策グループはじめ関係者の皆さまのご尽力に感謝申し上げます。

## エゾシカ管理の将来に向けて

グランドデザインでは、理想的な未来像とそれに向けたロードマップを提示しています。理想像のない対策は方向

性がいまいになりがちです。関係機関が主体的に連携し、共通の理想像を持つことにより、本当に今行うべき、意味のある対策が見えてくるはずですが、グランドデザインは、作成することが目的ではありません。これを具体的に実行していくことが大切です。知事からも、「しっかりこれから提言を具体にするためにまたご協力をお願いする」というご発言がありました。

グランドデザインはエゾシカ協会ウェブサイトで公開されています ([http://yezodeer.org/grand\\_design2018/2018\\_grand\\_design.pdf](http://yezodeer.org/grand_design2018/2018_grand_design.pdf))。みなさんで理想を現実に変えていきましょう！



# 英国 ハンティング スクールへの道 その9

一般社団法人エゾシカ協会副会長  
酪農学園大学狩猟管理学研究室

伊吾田宏正 igoth@rakuno.ac.jp

2013年8月、西興部村・下川町・滝上町からなるオホーツク山の幸活用推進協議会のハンティングスクール構築事業の一環で、当地のシカ捕獲者教育システムの実態調査をしてきました。今回は、Deer Initiative（以下、DI）という団体が作成した、シカ捕獲者向けテキスト Deer Best Practice Guides（以下、DBPG）の紹介をしたいと思います。

DIは、イングランドとウェールズにおけるシカ類の適正な持続的資源管理を推進する非営利団体です。英国環境農水省、林野庁などが出資して1995年に設立されました。9名のスタッフがウェールズにある本部と各地（5地域）に配置されています。DIの活動目的は、ハンター・土地所有者・政府などにシカ管理の助言を行い、様々な管理オプションを提供することにあります。イギリスではシカの管理に関する補助金制度があって、例えば、解体処理施設や捕獲個体の回収用バギーなどが対象となっています。対象にもよりますが、50%は自己負担、イギリス政府と欧州委員会がそれぞれ25%を負担するものが多いそうです。他に、国有林の補助事業でハイシートや回収用ウィンチを整備する事業もあります。

さて、前述した狩猟学校 Sparsholt College において、

DIのJamie Cordery氏から、DBPGについてのレクチャーを受けました。DBPGは、30のシカ関係組織による既存の80のプログラムを統合した体系的なシカ管理に関するガイドラインで、イラストや写真も充実して、大変分かりやすい内容となっています。DIのDBPGはイングランドとウェールズ版で、スコットランド自然遺産局が作った同地のDBPGをベースに作られました。その構成要素は、①テキスト（ハードコピーまたは電子版が利用可能：[www.the.deerinitiative.co.uk/best\\_practice/](http://www.the.deerinitiative.co.uk/best_practice/)）、②方針（テキストにも示されるシカ管理に関する正しい考え方）、③助言（DI等に問い合わせればより詳細な助言が得られる）となっています。DBPGに基づいて、現場でよい成果を得ることが最も重要とされているのです。“Make Best Practice Common Practice（優良事例を一般事例に）”が、これらを象徴するスローガンとなっています。

DBPGの章立てを表に示しました。法令からモニタリング、捕獲、食肉衛生と、とても包括的な内容となっているのが分かります。DBPGは、以前紹介した英国シカ捕獲認証DSCとリンクしており、当協会のシカ捕獲認証DCCのテキストもDBPGを参考に作成しました。



表. Deer Best Practice Guides in England and Walesの章立て

Chap.1	法令・健康・安全・福祉（関連法令、夜間狙撃、リスクアセスメントなど）
Chap.2	生態学（シカ類6種の生物学、痕跡、生息地への影響など）
Chap.3	記録と調査（各種調査法、年齢査定、捕獲記録など）
Chap.4	シカ管理（管理計画、個体群動態、広域管理など）
Chap.5	病気（栄養状態の評価、ライム病、牛結核など）
Chap.6	シカ捕獲（射撃部位、追跡、止めさし、ハイシート、猟犬など）
Chap.7	食肉衛生（回収、一次処理、検査など）
Chap.8	銃器（運搬、保管、ライフルと装弾、安全管理、照準調整など）

## 異分野を学んで高みを目指そう！

一般社団法人エゾシカ協会専務理事

東谷宗光 azumaya@yezodeer.org

2015年から実施しているシカ捕獲認証制度（以下、DCC）では、受講後のフォローアップを目的に、受講者を対象にネットワークを構築しています。ネットワークでは、メーリングリストを利用した情報共有と年2～3回の研修会を開催しています。これまで4年間で計9回の研修会を開催しました。

### 「リスクマネジメントを学ぶ」

2018年度第1回目の研修会は、9月16日に「ニセコネイチャーガイド Forestrek（フォレストレック）」の矢吹全氏を講師にお招きし、「リスクマネジメントを学ぶ」を開催しました（上の写真）。リスクマネジメントの考え方を



中心に3時間の研修を実施しました。研修の中で特に強調されていたのは、「大なり小なり事故はいつか起きる」という点と、そのうえで「いかに事故を最小限に留めるか」という点です。そのためには、意識して日々の活動を反省し、コツコツと問題点を改善していくことが重要となります。慣れてしまうと細かな部分が疎かになってしまいがちですが、自身としても改めて気を引き締める良い機会となりました。

### 「歴史から学ぶ」

2018年度第2回目の研修会は、9月30日に北海道博物館学芸員の山田伸一氏に講師をお願いし、「歴史から学ぶ 北海道の野生動物管理—明治初期編」を開催しました（下の写真）。明治初期の北海道ではシカやヒグマ、オオカミ、カラスはどういった対象として扱われてきたのか、その過程で狩猟制度はどう変化していったのか等、開拓使を中心とした過去の文献の調査・研究成果を発表していただきました。シカは、個体数が激減するまで、肉のみならず皮や角まで利用され、有益な資源として管理されてきました。一方で、耕作や牧畜に被害を及ぼすカラスやヒグマ、オオカミは多くの資金を投入して徹底的に駆除され、その結果オオカミは絶滅しました。過去の取り組みの結果どういっ

たことが起こったかを学ぶことで現在の制度の背景や野生動物管理の在り方について考える機会となりました。

今後も会員の方からの要望も考慮しながら、年2回程度の研修会を企画し、各自のスキルアップができる場を提供していきたいと思います。



# 最新のエゾシカの生息動向

宇野裕之 uno@hro.or.jp

北海道立総合研究機構・環境科学研究センター

**北** 海道は、毎年6～7月に開催されるエゾシカ対策有識者会議（以前は「エゾシカ保護管理検討委員会」）における検討を踏まえて、地域別の個体数指数を公表しています（北海道HP、[http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/est/index/H29\\_kotaisuusisuu.pdf](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/est/index/H29_kotaisuusisuu.pdf)）。これは秋期に全道で行われているライトセンサスや雌雄別捕獲数データを元に基準年を100として推定した相対値であり、生息数の動向を示す指標となります。

平成29年度の東部〔オホーツク・十勝・釧路・根室〕の指数は中央値が114（H5年度が基準年）で過去6年間減少傾向を示しています（図1a）。一方、西部〔石狩・空知・上川・留萌・宗谷・胆振・日高〕の指数は中央値で268（H12年度が基準年）と推定され、平成23年度をピークに減少したものの、平成28年度から再び増加に転じた可能性が示唆されました（図1b）。さらに南部〔渡島・檜山・後志〕では平成23年度から一貫した増加傾向を示しています（図1c）。各地域で基準年が異なるのは、ライトセンサス調査を始めた年度が市町村ごとに違い、東部では早く、南部では遅かったことなどによります。

北海道エゾシカ管理計画（第5期：H29～33年度）では、個体数指数を東部で50以下、西部で150以下、南部では減少に転じさせることを目標としています。各地域で積極的な捕獲対策が取られていますが、いずれの地域も目標を達成できていません。ランドデザインでは期間を概ね20年程度として中長期的な資源管理のための理想像を描いています。個体数管理の目標達成とそれによる農林業被害や交通事故など軋轢の軽減、そして中長期的に資源を持続的に利用しながらエゾシカとの共存を図っていくためには、市町村を中心とする捕獲体制を整えるのと同時に、シカ捕獲認証（DCC）など地域の管理を担える人材育成が不可欠だと考えられます。

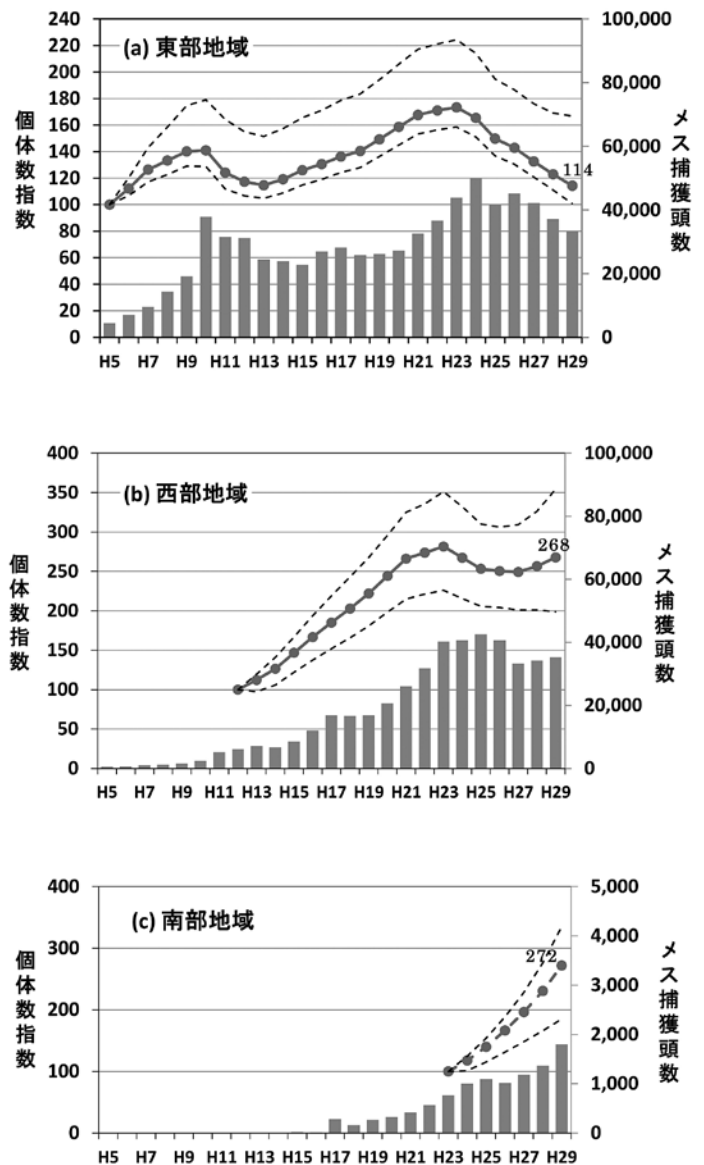


図1. エゾシカの地域別個体数指数およびメス捕獲頭数の推移。H29年度の捕獲頭数は速報値（エゾシカ対策有識者会議資料から作成、北海道HP参照）

# ワナ猟の世界

連載第18回

## なぜ狩猟をするのか？

伊藤英人

hideto@asakura.co.jp

朝倉書店編集部

### 狩猟の動機の変化

「そもそも、なんで狩猟しているの？」

狩猟にあまり接点のない人からよくくる、面倒だが重要で答えづらい質問。おかげで、いつも考えさせられている。5年前に小学校で講演したときの資料を見つけ、今と考えがずいぶん変わっていることに驚いた。

#### 狩猟開始前の動機

- ・自然に関する知識や技術を得たい
- ・その知識や技術で獣と勝負したい
- ・食への感謝の気持ちを感じ敬意を表したい
- ・肉になるまでの過程を知る義務がある
- ・日本の狩猟と野生動物管理の現状を見たい
- ・自分が猟奇的でないことを確認したい

#### 10年経った今の動機

- ・知識や技術で獣と勝負したい
- ・フィールド感覚を維持したい
- ・若い人や息子に狩猟を教えたい

まず、「モテたい」がないところに真剣さがうかがえる。そして、初期の無知ゆえの（しかし重要な）目的はある程度達成し、生意気にも教育を始め、自己研鑽に集中できている。解体などは自分でやるほうが早いきれいに仕上がるが、若者に任せたほうが将来のためになると考えている。

「食への感謝」については、さほど考えなくなった。当初は獣側への配慮と考えていたが、食べられる側に見れば、感謝され、おいしくいただかれ、供養されたところで死ぬのは同じで、純粹に人間側の問題であった。今、若

者に教えたいたいの、いのちへの敬意と畏怖であり、一方的で傲慢な感謝などではない。

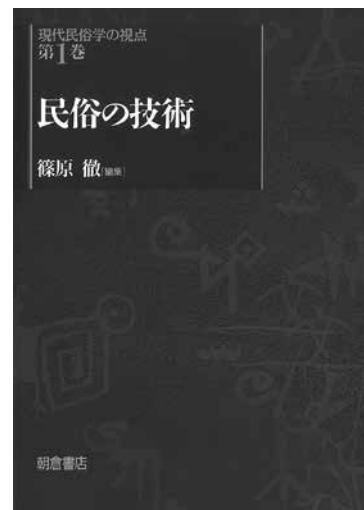
### マイナーサブシステムとしてのワナ猟

次に、狩猟のおもしろさの神髄である、獣との勝負について考える。現在の狩猟民はわりと豊かで、採集などに支えられる面が大きく、狩らないと死ぬというほどではない。松井（1998）は、経済的に主要（main subsistence）でも、重要である（major subsistence）と認識していても、細々と、意外なほどの情熱をもって行われている生業を minor subsistence と名づけた。内藤（2015）のまとめによると、マイナーサブシステムの特徴として、①伝統的、②比較的単純な技術水準であるが高度なスキルが要求される、③スキルの習熟・知識などによる成果の個人差が大きい、④名声や喜びなどの情緒的価値が活動の動機に含まれる、⑤娯乐的ではあるが、ある程度の経済的な意味はあり、単純な遊び/労働の二分法では扱えない、⑥対象が大量捕獲できない特質をもっている、⑦対象の自然との距離が近く、多分に身体性を要求する、の7つを挙げている。松井は宮古島のサシバ獲り、内藤は久高島のマグロ釣りを例示しているが、ワナ猟こそこれにふさわしいと思う。②、③、⑥、⑦は獣と真剣勝負するための前提条件で、ワナ猟者のプライドである。⑤が狩猟の深みで、ふざけた遊びではなく、まじめな「遊び心」である。鳩射撃がクレー射撃に代替されてしまったが、ワナ猟には代えがたき魅力がある。生態系に悪影響の少ない範囲で、今後も駆け引きをしていきたい。そこから生まれる自然知が、人と動物との関係にプラスになると確信している。

冒頭の質問に対し、ここまで説明すればスッキリするが、長すぎる。結局、「おなががすくから、肉屋に行く感覚で、狩りに行っている」と答えることにしている。

### 文献

松井 健（1998）「マイナー・サブシステムの世界」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店、247-268頁。  
内藤直樹（2015）「私たちはいかにして魚と出会うのか？」木村大治編『動物と出会う』ナカニシヤ出版、37-55頁。



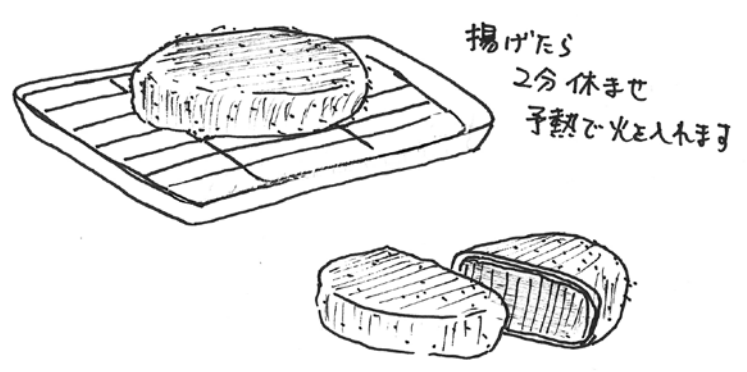
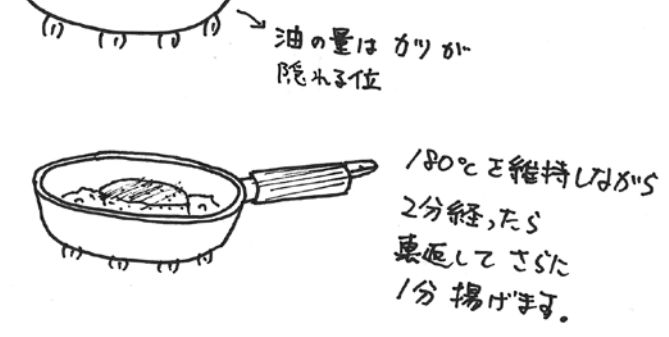
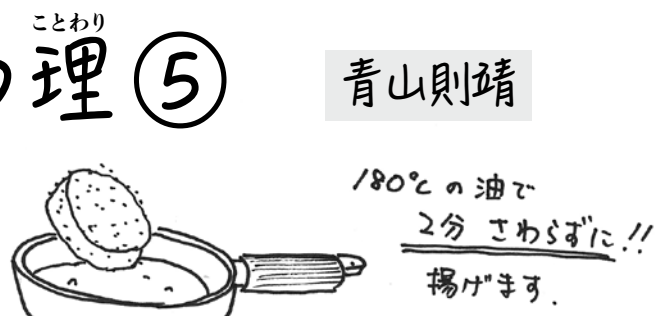
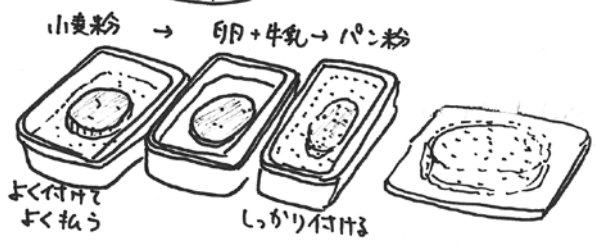
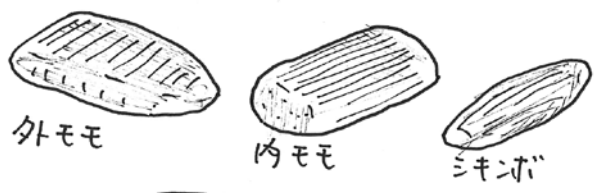
エゾシカ カツレツ

料理の理 ⑤

青山則靖

◎材料

エゾシカ モモ肉 (筋が少ない部位がお好み)



エゾシカ カツレツ

Kitchen Support 青 <http://supportao.exblog.jp>

エゾシカは赤身で脂身が少なく旨みがしっかりあるお肉です。その赤身の旨みを閉じ込めて存分に味わうのにおすすめののがカツレツです。

部位はモモで筋の少ない外モモ・内モモ・シキンボあたり。繊維に対して垂直に切り（ステーキカットの要領で）、厚さは1～2cm くらいがおすすめです。

エゾシカ肉常温に戻し塩・胡椒して、小麦粉→卵（牛乳で溶いたもの）→パン粉の順で付けていきます。ポイントは小麦粉をしっかりとつけて、しっかりと払うこと。ここを厚付きにしまうと卵液をはじいてパン粉の付きにムラができてしまいます。

油の温度は180℃程度、油にいれた

ら2分は触らずに揚げます。油に入れた直後は衣が出来る前が一番はがれやすい時です。カツレツは衣の中で旨みや肉汁を溜めている状態なので、はがれると旨みが外に逃げてしまいます。

2分経ったら裏返して更に1分揚げます。そして油から上げたら2分ほど予熱で火を通すと同時に肉汁を落ち着かせます。揚げたてが一番な感じですが、揚げたてを切ると油も切れていなく肉汁も落ちていないので、どんどん漏れ出してしまっていて、折角の美味しさを逃がすことになってしまいます。少し休ませることで肉汁がお肉に留まりしっとりと仕上がります。

このままで十分美味しいですがおすすめのソースはハニーマスタード。粒

マスタードをハチミツと少量の練り辛子と酢で溶くと酸味と甘みがエゾシカの旨みを引立てます。

一般社団法人エゾシカ協会  
 ニュースレター第45号  
 発行日 2018年10月20日  
 編集発行 一般社団法人エゾシカ協会  
 代表理事 赤坂 猛  
 事務局長 松浦友紀子  
 〒064-0803  
 札幌市中央区南3西21-1-6  
 電話 011-611-8861  
 MAIL info@yezodeer.org  
 URL http://yezodeer.org  
 印刷 株式会社須田製版  
 滝川市栄町 3-5-16  
 無断転載を禁じます。  
 © 2018 Yezo Deer Association, All rights reserved.